

宇沢弘文先生

松島斉（東京大学大学院経済学研究科教授）

2016年7月17日

宇沢弘文先生は経済学の巨人であり永遠の存在です。宇沢先生は、数理経済学黎明期に膨大な学術貢献をされ、世界の経済学界のスターになり、スタンフォード大学やシカゴ大学を歴任されました。マクロ経済動学における業績はノーベル賞に値します。

しかし宇沢先生は、脂の乗り切った1968年、東京大学に戻られます。すると一変して、数理経済学を強烈に批判する姿勢に転じました。このことが、宇沢先生を「永遠」たらしめる所以になります。

数理経済学はこのままではだめだ。経済を記述するモデルが1つしかない。それは、社会の条件を無視して経済効率を追い求める、非人間的な市場原理だ。これでは、経済の本質を社会科学的に問い、ふさわしい分析を開発していく、科学的アプローチをとれない。

宇沢先生は、このことを「経済学の危機」だと我々に突き付けたのです。私は、宇沢先生が、「アメリカ政府の要請で、多くの経済学者が、ベトナム人を殺すのに必要な費用便益を計算していた」というお話をされた時の「ものすごい形相」を、一生忘れません。こんな曲学阿世に走る経済学者に、経済学の危機を感じとられたのでしょうか。

今日、貧困、教育、医療、環境は、経済学の先端領域です。これらのため、ゲーム理論、メカニズムデザイン、ミクロ実証の計量経済学が高度に開発されました。奇しくも、宇沢先生が「社会的共通資本」と称して、経済学にとってもっとも重要だとお考え

になられた領域と一致します。

社会的共通資本に不用意に経済効率を持ち込むと社会に混乱がもたらされる。官僚的ガバナンスは禁物で、おろかな専門家が権力におもねるのを阻止しないとイケない。

これらは大学制度の在り方を考える際にも大いに留意されるべきです。経済学の危機は、今後も純粹に問われ続けなければならない、社会の切実な問題なのです。